

# 博物館常設展の展示更新

井出口 龍 哉\*

The Renovation of the Kagoshima Prefectural Museum's Permanent Exhibit

Tatsuya IDEKUCHI

## はじめに

文部省の「社会教育調査」によると、全国の博物館数は博物館類似施設を含めて平成5年度現在3,704館である。その中で、登録博物館及び博物館相当施設の数の推移をみると、昭和56年（1981）は578館であったものが、平成5年（1993）には861館と12年間に283館増加している。博物館類似施設を含めるとこの10年間に相当数の博物館施設が開館していることになる。博物館の展示は、資料を通した普及活動であり、部分的な更新、手直しを行っていても、10年以上も経過すると、展示資料の退色・劣化等の老朽化が目立ち、研究の進展によって展示内容も時代にそぐわなくなったり古くなったりする。また、ここ10年間に展示手法が大きく変化してきているため、ハード面やソフト面で新鮮味が失われ、全体的な展示更新を余儀なくされている館も少なくないと思われる。しかし、展示に関する文献は多数見られるが、展示更新に関する報告や文献はまだ少ない。

学芸員の重要な役割のひとつは、展示活動を通して研究者の成果を博物館利用者に適切にしかも分かり易く紹介することであり、梅棹忠夫元国立民族学博物館長は「博物館は、ひとつの情報伝達装置である」（1987）とも述べている。博物館の展示活動は、絶えず新鮮な情報を時代に応じた展示手法で提供することであり、博物館活性化のためにも積極的に展示更新を進めたいものである。全面的更新となれば、多くの予算を伴うが、新鮮な内容と情報を提供することによって、利用者の知的欲求を満足させ、生涯学習を推進し、感動を与えることで十分に採算が取れるという発想のもとに、積極的に取り組みたい。

当館では平成2年度と8年度に本館2階及び3階の展示を更新する機会を得たので、その事例をもとに、博物館常設展における展示更新の実際とその在り方について考察してみる。

この2回の展示更新においては、当館協議会委員、各分野の研究者、大学関係、試験場等の研究機関、市町村教育委員会、民間企業の方々など多くの皆さんから御指導いただき、また、貴重な資料を提供していただいた。展示委託した業者の方々からは斬新な提案をいただき、また、設計・改装工事に誠意を持って携わっていただいた。これら多くの皆さんに厚くお礼を申し上げたい。

## 1 なぜ展示更新をするのか

新しく創られた物が、完成して製品になった途端に古くなっていくのは当然であり、博物館の常設展示も例外ではない。特に、自然系博物館においては、調査研究の進展、学術的新知見などから

不都合な展示も生じてくる。デンバー自然史博物館理事長は「博物館は常に未完成である」とさえ述べている。そのために、学芸員は新しい知見に関する研究や展示手法の開発に努力し、展示内容の充実・改善に努める必要がある。さらに、展示手法や博物館の利用法が大きく変化しており、体験参加型などのアミューズメント性を求める声にも応える必要がある。一方、常設展示はそのコンセプトや全体を通した展示ストーリーが十分検討されて創られているため、不用意な部分的更新はこれらを曖昧にし、館の特色を失わせることにもなる。また、いつ行っても同じ物（資料）が展示してあるということも再入館者（リピーター）にとって大切なことである。

従って、展示更新に当たっては、変えてはならないものと時代の進展に応じて変えなければならないものについて利用者の意見・評価を十分参考にしながら、その目的・意図を明確にし、多くの人々に十分な理解を得られる計画を練る必要がある。すなわち、常設展示を更新するということは、単に古くなり入館者が減少したので新しくするというのではない。現在では、生涯学習が定着し、博物館が情報を発信するメディアのひとつであるという認識が浸透しつつあるので、少なくとも10数年以上経過した常設展示は、これらの要望に応えるために展示更新が必要であろう。そこで、当館を例に「なぜ展示更新をするのか」について考察してみる。

### 3 階展示場の場合

昭和28（1953）年3月に発足した鹿児島県立博物館は、昭和56（1981）年1月に県文化センター科学課（昭和41年（1966）開館）を併合し、旧県立図書館を本館として改装し、2階は「鹿児島の自然」の展示場、3階は科学課から引き継いだ「理工系」展示場となった。なお、旧県立博物館の建物は考古資料館となり、県文化センター4階にある恐竜化石展示室とプラネタリウムはそのまま引き継がれて現在に至っている。

このうち、科学課から引き継いだ本館3階展示場は、交通パノラマやロケット発射ジオラマ、体験型展示品など子どもたちに非常に人気があり、また、職員の工夫を凝らした作品の展示など、児童・生徒の科学する心の育成に十分貢献していた（写真1）。しかし、体験型理工系展示品の劣化・退色は激しく、担当職員の毎日のメンテナンスだけではどうにもならなくなり、また、科学技術の進歩に遅れた展示資料もでてきた。さらに、鹿児島市に新科学館の建設が計画されたこともあり、当館の特色を「鹿児島の自然及び自然と科学とのふれあいについての展示」と明確にするために本館展示場全体の見直しを行い、自然系の展示を充実させることとして平成2（1990）年に3階展示場の全部（写真2）と2階展示場の一部更新を行った。

### 2 階展示場の場合

本館2階は、「鹿児島の自然」「桜島展示室」「分類展示室」の3室に分かれていて、特色ある鹿児島の自然を紹介するとともに、自然科学の学習の場となっていた。「鹿児島の自然」では、鹿児島の海（黒潮）、鹿児島の大地の歴史、特に火山に関する資料の展示・解説、県本土各地域毎の自然の紹介、カワゴケソウ・ツマベニチョウの分布、屋久島ジオラマ、トカラ列島の自然、奄美大島の自然など、鹿児島の自然を各地域毎に網羅した展示であった（写真3）。展示場中央には、当館のすぐ裏に控え、暖温帯の代表的照葉樹林として天然記念物に指定されている「城山の自然」の手作りによるジオラマがあった（写真5）。「桜島展示室」は、桜島の

噴火史、特に、大正3年1月の大噴火に関する資料・解説を中心にしたものであった(写真7)。「分類展示室」は、動物の分類系統に従って盛り沢山の剥製標本を展示し、また、フロア中央では骨格標本を比較しながらセキツイ動物の体のつくりを学習できる展示になっていた(写真9)。平成2年度の展示更新の際は、それまでに蓄積された研究成果や資料等を加味して、火山に関するコーナー、アサギマダラの季節移動、奄美大島コーナーなど部分的に更新した。各コーナーは、10数年に亘って常設展示に手を加えてきた結果、盛り沢山の(情報の多い)展示場となり、手作りで中味の濃い内容であると言われてきた。また、剥製や骨格標本など珍しい展示資料があるということで小・中学生の団体客が非常に多かった。しかし、個々のコーナーは充実してきたが、全体としての展示ストーリーが次第に不明瞭になってきた。解説パネルや展示資料の退色・劣化は限界にきていて、現代の学説や考え方にそぐわない部分もでてきた。また、現在は自然を分野別に見るのではなく、自然のつながりの中で人と自然との共生を探るという方向に進んでおり、当館で行った有識者へのアンケート調査でも総合的展示への転換が提案されていた。

また、最近の傾向として、児童・生徒の団体が全員一緒ではなくグループで観覧・利用することが多くなった。そのため、団体を対象に解説する場が少なくなり、展示装置そのものに学齢や年代・専門性に応じて、それぞれが楽しみながら理解・活用ができる多層構造的な展示の工夫が一層必要となった。

今や博物館は生涯学習における中核施設であると同時に、余暇を有効活用する場、体験しながら学ぶ場など多様な役割を求められ、展示手法も陳列から展示へと変化してきている。また、自然系博物館の展示においては、分野別の展示から人を含めた生態系を基本においた総合的な展示への転換が求められている。

当館の場合、常設展示資料の退色・劣化等も展示更新の起因とはなっているが、近年の博物館や類似施設の展示手法の大きな変化もあり、県内外からの利用者の期待感や「もっと明るく」「もっとアミューズメント性を」といった要望の高まりがあった。また、「造礁サンゴについて」という個々の情報だけでなく、「サンゴ礁での生態系」という総合的な情報の提供が必要になってきていた。このような利用者の要望に応え、教えることだけでなく情報を提供していくことも、「親しまれ開かれた博物館」としては重要であり、また、人と自然との共生という視点で自然について考えてもらいたいということもあり展示更新が必要であった。

博物館が新設される際に展示更新のことまで検討されることはほとんどないと思われるが、いつかは展示更新が必要となってくる。博物館が新設される時点で、できたらそれ以前から展示更新を考慮した調査研究や資料収集、施設設備の設計が行われれば理想的である。いつか来るであろう展示更新のために資料収集や調査研究を進めながら、部分的な展示更新や企画展等で利用者等の反応(評価)を見ながら、全面的な展示更新の準備を積み重ねる必要がある。保存科学の研究が進んでも、展示手法の変化や科学的進歩の早さから、10年以上そのままの常設展というのは多くの問題点が生じていると思われる。もっとも利用者の評価を見ながら何年間かけて展示を徐々に完成していくという手法を取るのであれば別だが。特に、体験型の展示資料は一層劣化が激しいので、おそらく5年位の目処で更新する必要があるだろう。ある館では、開館と同時に次の展示品の開発を

始めた」と聞いたが、理工系博物館等では特に大切なことであろう。

当館においても、昭和56年に改装・更新が行われた時点で、鹿児島県生物学会において、10年後には「鹿児島の自然」に関する大規模な博物館が必要であると話題にされているが、今回このことが展示更新という形で実現したことになる。

## 2 どのように展示更新するか

「どのように展示更新するか」は、博物館によって異なるのは当然であるが、「なぜ展示更新するのか」ということをどの程度きちんと整理するかによって、このことが大きく左右される。老朽化したから新しくするというのでは、展示改装ではあっても展示更新とは言い難い。新しく創られる展示場での展示と異なり、既存の展示品や展示施設を撤去あるいは変更しての展示で、更新前の内容や状況が多くの人々に知られ、それなりに評価されていただけに、更新前と更新後の基本構想の類似点と相違点を確認しながら展示更新の意図を明確にしていく必要がある。また、内容を発展的に拡充していくのはもちろんであるが、展示デザインや展示手法についても将来を見越した館独自のものを開発していく必要がある。

当館の場合、まず、3階展示場の更新を急がなければならない状況になっていたため、前述のように平成2年度に3階展示場全体と2階展示場の一部の更新を行った。その後、2階展示場についてアンケート調査等で多くの意見をいただき、また、関係の方々の理解も得られ6年後の平成8年度にエントランス及び2階展示場の全面改装と展示更新を行った。この2回の展示更新の概略を述べ、その違いを考察してみる。

### 3 階展示場の場合

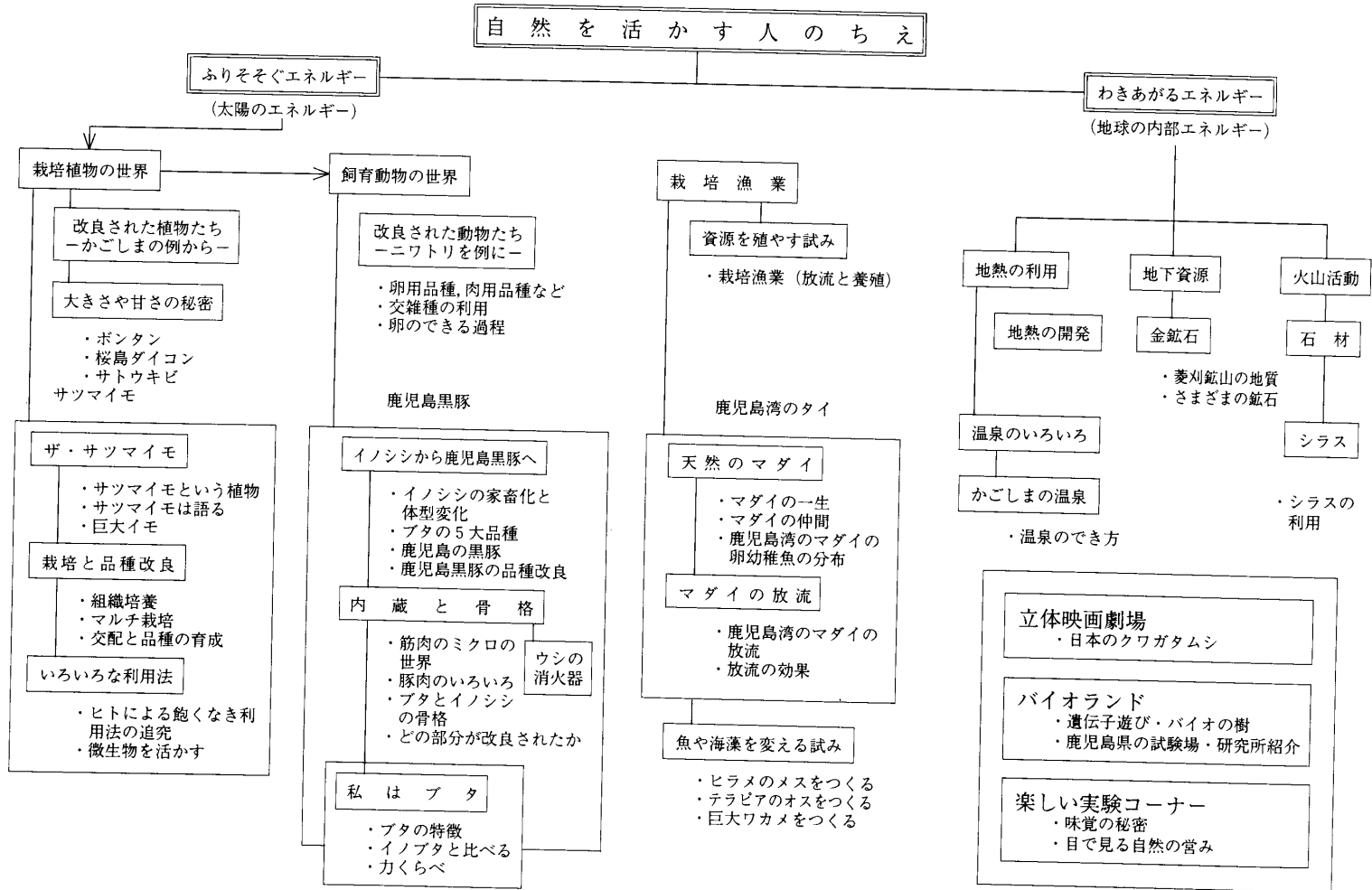
3階展示場の展示更新の詳細については、筆者によってすでに発表されている(1991)ので、ここでは要点だけを述べることにする。基本的には次のような構想で進められた。

- ① 新しい展示シナリオのもとに全面的に改装する
- ② 内容は、自然と人との関わりについての展示とし、産業科学と生命科学さらには環境問題とを結びつけたもの、そしてマグマのもたらす地下資源としての恵みを取り上げる。鹿児島県に關係の深いものを素材とし、現代の新しい情報も広く紹介する。
- ③ 県内の試験場・研究機関の成果を紹介する窓口にする。

具体的には、展示場を理工系から自然系に更新して、本館全体を「鹿児島の自然」に関する展示場とし、3階展示場を2階展示場の「あるがままの自然」の延長線上に位置づけて自然史応用(産業科学)部門とすることにした。

南国鹿児島は太陽のエネルギーに恵まれ、また、プレートの潜り込み地帯の大陸プレート側にあり、マグマのエネルギーやその生成物に恵まれている。それらの様子を「自然を活かす人のちえ」を大テーマに、エネルギーをキーワードとして、「ふりそそぐエネルギー」と「わきあがるエネルギー」の中テーマを設定し、自然界のエネルギーの流れの中で、我々人間が生活に使うためのエネルギーを獲得する効率を飛躍的に上げて来た様子、地熱・温泉・金鉱床などマグマの恵みの利用など、人が動植物や自然に積極的に働きかけてきた産業科学について紹介することにした(写真2)。全国的にもあまり例のない展示内容を設定し、トカラ列島の口之島で、80年以上

表1 3階 自然史応用（産業科学）部門展示場 展示シナリオ



前に放置され、そのまま人の手が加えられることなく野生化して現在に至っている野生化牛を導入展示として、サツマイモ・サツマドリ・鹿児島黒豚・放流マダイといった鹿児島にとって馴染み深い素材を用い、ひたすら豊かな食生活を求めて開発・改良を続けてきた農・畜・水産業の歴史と現在のバイオテクノロジーを展示・紹介している。豊かな我々の食生活を支えている栽培植物・飼育動物等の役割とともに、野生植物から創り出されて文化とともに我が国に移入された栽培植物、野生動物の家畜化と現在の飼育動物、栽培漁業の取り組みについて十分理解して、食糧としている動植物に思いを馳せて欲しいと願ってストーリーを作成した。また、地下資源コーナーでは、地熱発電、県内各地に湧き出る温泉、金鉱床が多い鹿児島、世界一の品質を誇り現在掘削されている菱刈鉱山のような金鉱石、火山噴出物であるシラスの活用など鹿児島ならではの鉱業の様子を紹介している。自然を活かす人の知恵のすばらしさとともに環境問題と私たちのこれからの生活について考えるきっかけにしてもらうため、表1のような展示シナリオを作成した。

## 2 階展示場の場合

平成2年度に一部展示更新に留めた2階の展示を全面更新することとし、基本的には次のような考え方で進めた。

地域に根ざした自然系博物館として、総合的な視点から「鹿児島の自然」に関する学問や研究の最新の成果を積極的に取り入れるとともに、利用者が来館のたびに新たな発見や体験が可能で、かつ楽しみながら知的好奇心を満足することが出来るような魅力ある展示とする。展示内容や意図を利用者に分かり易くするために次の事柄に留意する。

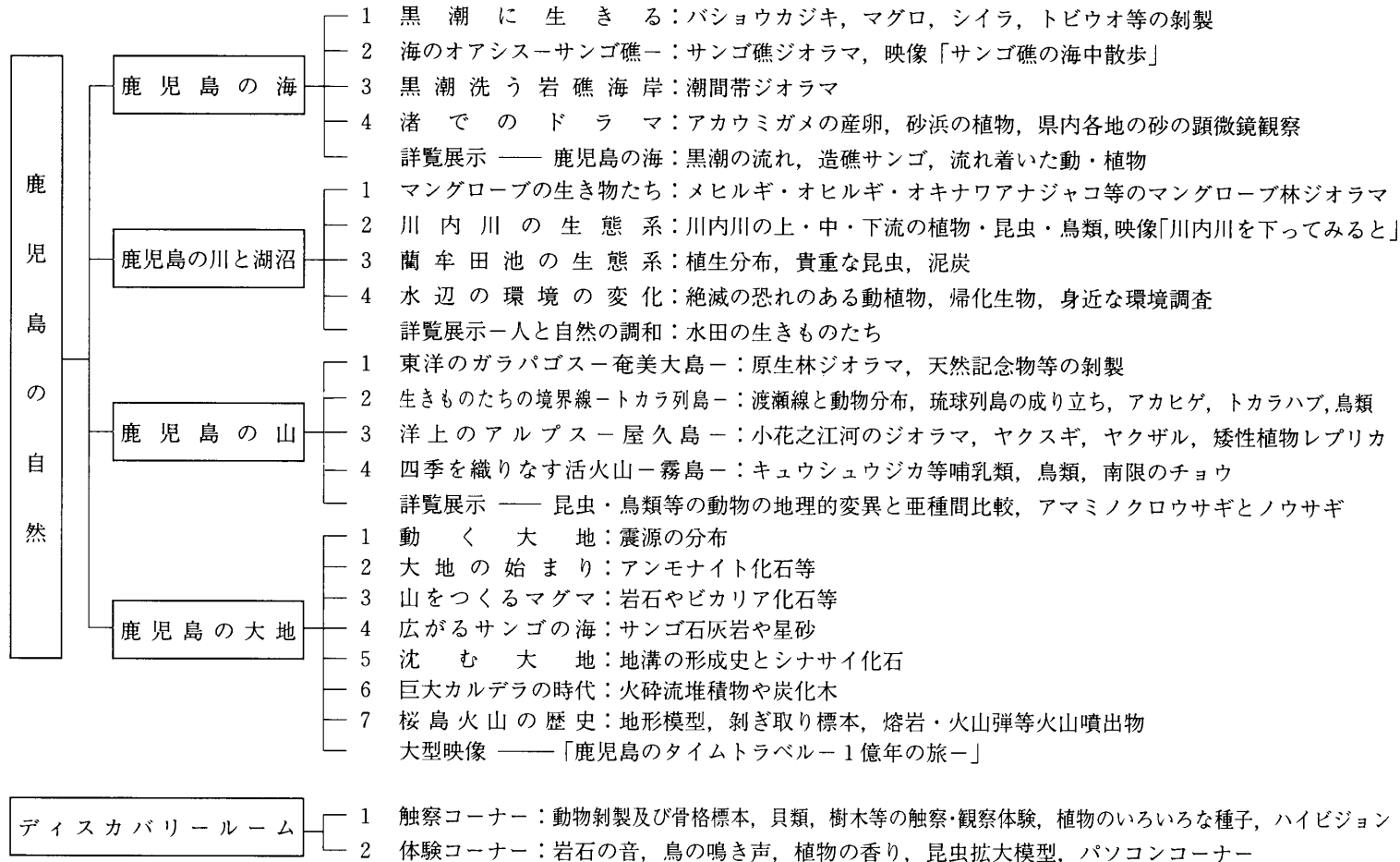
- ① 展示構成 ・郷土の自然をテーマとする展示 ・物語（ストーリー）性のある展示  
・アクセントのある展示
- ② 展示内容 ・話題性のある展示
- ③ 展示方法 ・分かり易い展示 ・楽しめる展示 ・五感に訴える展示  
・障害者に配慮した展示

南北600kmに及び、2つの気候区を持ち、地殻変動の激しい地域の自然を分かり易く紹介し、また、自然への理解を深め、関心を高め、自然を大切にする気持ちを養うような展示にする。大テーマは従来と同じ「鹿児島の自然」とし、中テーマとして「鹿児島の海」「鹿児島の川と湖沼」「鹿児島の山」「鹿児島の大地」の4テーマを設ける。また、本館入り口のエントランスホールは、明るい雰囲気を楽しめる自然系博物館への導入展示とし、旧分類展示室を体験コーナーを設けた「ディスカバリールーム」に改装する。

さらに、明るい雰囲気を創るために、照明だけでなくエントランスホールから階段、展示場までの色彩計画をきちんとする。

これらの基本的な考え方をもとに、表2のようなコーナーで構成し、黒潮の流れに乗って南から北へ、また、低地から山頂へと鹿児島の自然を旅し、鹿児島の大地では鹿児島1億年の時間の旅をしてもらうストーリーにした。できるだけ動的で豊かな自然の展示、フィールドに出かけたくなるような展示、身近に観覧できる展示、そして何回でも楽しめる展示を心掛けた（写真4）。そのためにオープン展示を主とし、明るい雰囲気を作るために色彩を多く使い、窓ガラスはカッ

表2 2階 自然史部門展示場 展示シナリオ



エントランスホール：省略  
階 段 部 分：省略

ティングシートで外光を遮断してスポット照明の効果をあげた。各ゾーンとコーナー全てに鹿児島県の地図を用い、各コーナーでは自然の旅の案内役としてナビゲーションアニマルが来館者に語りかけ、鹿児島の東西250km・南北600kmという広さと自然の豊かさを実感してもらっている。また、ジオラマを増やし、説明パネルを少なくしたため、展示できなかつた情報を補うために詳覧コーナーを設けた。このコーナーは、多様な展示ができる造りにし、引き出しも展示スペースにした独立型可動ケースを用いている。

各テーマ毎のコーナーは次のようになっている。

### 鹿児島海

温暖な気候と海の恵みをもたらす黒潮の流れと一緒に、海のオアシスといわれるサンゴ礁、溶岩からなる岩礁海岸、日本三大砂丘のひとつ吹上浜と旅をしてもらっている。鹿児島の特色ある自然海岸を紹介する中で、黒潮の中の魚類、サンゴ礁と造礁サンゴ、潮間帯の生き物たち、アカウミガメの産卵、県内各地の砂浜の砂粒の違い、砂浜の植物などを紹介し、詳覧コーナーで黒潮に関する事柄をさらに詳しく紹介している。

### 鹿児島川と湖沼

河口から陸地へと旅は続き、リュウキュウアユの生息する奄美大島住用川河口のマングローブ林の生態系、5つの盆地を持ち南九州で最長の川内川の上・中・下流域の自然、火口湖で泥炭形成の南限である蘭牟田池とたどり、水辺環境の変化から自然愛護について考えてもらっている。自然のつながり（生態系）を基本に、メヒルギ・オヒルギ・シレナジミ・オキナワアナジャコ・ベッコウトンボ・タガメ・鳥類などの貴重な動植物を紹介しながら、水辺環境の生き物たちの適応の巧妙さを観覧してもらっている。詳覧コーナーでは、最も人の手が加わった自然のひとつである水田の生態系について説明している。

### 鹿児島山

大陸との繋がりがあり、古い地層からなる奄美大島の照葉樹林、火山フロントに位置するトカラ列島、花崗岩からなり世界の自然遺産に登録された屋久島、多くの火山からなり日本で最初に国立公園に指定された霧島と鹿児島の代表的な山を素材にしている。奄美大島諸島は東洋のガラパゴスといわれるぐらい天然記念物や固有種が多く、それらと板根を持つオキナワウラジロガシを中心に製作した夜明けの原生林ジオラマの中で探してもらっている（写真6）。また、詳覧コーナーで固有種の特徴を詳しく観てもらっている。トカラ列島は生物分布の急変地帯として世界的に有名で、その成り立ち（地史）や生物分布の研究結果、渡り鳥のいろいろを紹介している。屋久島については限られたスペースではとても語り尽くせないが、湿原の小花之江河のジオラマ、ヤクスギ、ヤクザル、矮小植物レプリカなどで、実際に現地に行きたくなるような展示にした。四季の美しい霧島も行楽やハイキング、山登りに出かけ、自然に親しむきっかけになるようにきれいな展示になるように心掛けた。

### 鹿児島大地

震源の深度や分布から大地も動くことを理解してもらい、県内各地の岩石標本をもとに、鹿児島がまだ海底にあった1億年前からの大地の歴史を紹介している。奄美諸島のサンゴ石



灰岩、マグマに起因する山、鹿児島地溝（鹿児島湾）の形成、巨大カルデラの火砕流堆積物、桜島火山の歴史など地殻変動の激しい地域ならではのダイナミックな展示になっている。さらに、静的な展示を補うため、大型映像を導入してアニメーションビデオで1億年の時間の旅を実感してもらっている（写真8）。そして、現在の鹿児島海・川と湖沼・山を形成している大地を、時間軸の中で再度見直して貰うような展示を展開している。

### ディスカバリールーム

五感を使ったいろいろな体験をしながら自然を理解し、何かを新しく発見してもらえような展示とした。展示装置は、簡単に展示を替えられるようにしてあり、室内も明るく温かい雰囲気になるように心掛けた（写真10）。

平成2年度の3階展示場の展示更新では展示シナリオだけでなく展示設計も学芸職員の手で行い、パネル・展示ケース・什器等の製作のみを業者に委託した。時間的に困難を極めたが、陳列を避け、自然資料の展示に理工系の仕掛けを開発し、ビデオ、コンピュータでのQ & Aソフトなども作成した。（詳細については「常設展展示替えの実際」（1991）参照）

平成8年度の2階の展示更新は業者に委託して行ったが、展示設計・展示デザイン・展示装置の開発・ビデオ作成などについて、展示担当者との話し合いの中で3階の展示更新の経験を十分活かすことができた。時間的には同じであったが、調査研究の積み重ねがあった分野でもあり、オープン展示、効果音だけによる各コーナーのビデオを用いた景観紹介など、比較的細かな部分にまで、気配りの行き届いた展示になったと思っている。

展示更新は、その前後で雰囲気、展示手法などが大きく変わった方がインパクトは強くなるので、思い切った発想の転換が必要であるが、常設展は一過性の催し物の展示とは異なり、展示されているものに意図・メッセージがなければならない。すなわち、展示は伝えたいメッセージ（情報）を正確にそして明瞭に利用者へ伝達する装置でなければならない。インパクトを与える展示と情報伝達装置としての展示との調整・調和をどのように図るかが「どのように展示更新するか」の鍵になりそうである。

## 3 展示更新の条件

### (1) 施設設備

展示更新に当っては、新博物館建設の場合と異なり、既存の床・壁・柱・配管等、展示場そのものの改装・改築がどの程度できるか、ジオラマ・壁付ケースや旧展示資料の活用はどうかなどの施設設備面の条件も考えなければならない。全てを除去・廃棄して展示場の改装・補修後に新展示をする場合と、人気のあった（利用者の評価の高かった）展示品や利用可能な什器・展示品を再利用する場合とがある。また、電気容量の制限が生じることがあるかもしれない。

当館の場合、3階展示場は前者の方法で行った。2階展示場は後者の方法で行い、床は張り替えたが他は改装・改築を行わず、ジオラマ・平ケースは再利用し、旧分類展示室の壁付ケースはガラスをはずし、改装してディスカバリールームの多目的な展示スペースにした。また、天井が低いため奄美大島の原生林ジオラマの部分は、ルーバーを切り取り樹木を高くした。窓は暗幕で

外光を遮断していたが、前述のようにカッティングシートを貼り、内部をすっきりした雰囲気にし、外壁の補修とともにシートの色によって外観からも建物の美観を整えた。昭和初期の建物で、電気・水道・空調等の配管が内壁面上や天井部分に出ているが、ルーバーや展示パネル・ケース等を設置したり、スポット照明を多用することによって内壁面を暗くすることによって目立たないように工夫した。内壁面の前にさらに壁面を作る方法もあったが、窓ガラスや配管のメンテナンス、室内の狭隘化、工事費用等を考えると、可動式の展示ケースやパネル、照明効果等で相当なところまでクリアできた。電気容量についても制限が生じ、電照パネル等は設置できなかったが、電照パネルによる照明効果の減少を考えると必要ではなかった。また、展示場の広さの関係で、原生林ジオラマと屋久島ジオラマが重なり、両方同時に観覧できない配置になったが、原生林ジオラマ裏面の全面に森林の写真を貼ることにより屋久島の森林を通り抜ける雰囲気を作ることができた。さらに、展示担当者の提案によりジオラマの壁面にスポットウインドウ（覗き穴）を設けるなどして、狭い展示場を広く活用する工夫もなされた。

展示更新の場合確かにいろいろな制約はあるが、器は同じであっても中身を工夫すれば、器そのものの様子も大きく変わるものである。「どのように変えるか」ということだけでなく、視点を変えて「どのように生かすか」と考えることも重要であると思う。

## (2) 展示内容の調整

全面的な更新であれば、施設設備面からの制約はあるにしても、展示コンセプトを大きく変えることができ、展示更新の効果は期待できる。できるだけ、時間と予算をかけて全面的に一気に展示更新する方が望ましいが、事情によって全面的な更新が出来ない場合、利用者へのサービス、博物館活動の活性化のために部分的であっても展示更新を積極的に行う必要があると考える。ただし、部分的更新の場合、前述したように他との整合性を十分考慮しないと、更新した部分だけが目立ち、全体としてのストーリー性が乱れたかのような印象を与える。各コーナーを完結したストーリーにしておき、年次的に各コーナー毎に更新する方法もあるが、この場合は全体の流れを保つための制約が多くなり、展示内容の調整が困難になるとともに展示更新の効果は少なくなる。

当館の場合、2階と3階を別々に更新したが、大テーマを違えたため明確なコンセプトで展示ストーリーを創れた。多くの自然系博物館の行っている地球の歴史・生物の進化などの時間軸による展示については、別館の県文化センター4階の恐竜化石展示室で展開しているので、本館では豊かな「鹿児島島の自然」を広い視野で整合性を図った。南北600kmの鹿児島島の自然の全てを知り、楽しむことは難しいので、県外の方々だけでなく県民の皆さん方にも産業科学の分野を含めた鹿児島島の豊かな自然を本館の常設展示場全体で楽しんでもらっている。

## 4 展示更新の評価と効果

展示の評価・評論は、意見の分かれることが多いが、展示学事典(1996)によると「展示評価の目的は、基本的には期待(予測・計画)したメッセージの伝達が効果的に伝達されたか否かを判定するとともに、より効果的な情報伝達計画を確立するための基礎資料を整備すること」とある。ま

た、展示デザインの原理（1986）には、展示効果の評価を類型別に分類すると「総括的評価」「形成的評価」があり、前者は「展示装置の誘引力や魅力度の測定」で、後者は「予測分析であり、開発途上の展示装置に、設計者が意図するだけのメッセージ伝達力があるかどうか、ないとすればどう改善すれば期待する目的を達成できるかを見極める作業」とある。そしてその方法として、観察調査と面接調査があり、大英自然史博物館で行った統計学的処理の方法が説明してある。

当館では、行動追跡（動線）・滞留時間調査等の観察調査、アンケート調査を行っているが、残念ながらその方法が十分確立しておらず、調査数もまだ不十分である。しかし、その少ない調査数からもおよそ次のような傾向が見られる。

- ① 本館は昭和初期に建てられた建物で、デザイン的には古い感じを受け、入り口部分のガラスも狭く、エントランスが外からは十分に見えない造りになっているので、入館する前のイメージと展示場の新鮮な雰囲気の違いに驚く入館者が多く、展示場の改装及び展示更新の効果はあったと思われる。
- ② 入館者の本館での滞留時間が更新前より増加していることから、全体的には概ね好感を持って受け入れられていると思われる。
- ③ 2階展示場のサンゴ礁・マングローブ・原生林のジオラマなど奄美大島に関する展示が支持されており、滞留時間も長い傾向がある。また、トカラ列島コーナーは多くの人が時間をかけて観覧している。
- ④ 鹿児島島の大地のコーナーは、他に比べてパネルの説明が多く静的な展示で、展示資料の選択や展示手法に苦慮したが、顕微鏡観察・大型映像を設置したこともあり、じっくり観覧しているようである。
- ⑤ ディスカバリールームは長い人で40分以上滞留し、入室しなかった成人を含めても滞留時間は平均6分位になる。さらに充実することによって人気のある展示場になると思われる。
- ⑥ 3階に「とび出す映像館（3D劇場）」を設けているが、学芸員が身近な自然を素材に制作していることもあり、特に子どもたちには好評である。
- ⑦ エントランスホールは、余分なものを取り除き広々と明るい雰囲気にしたが、入館者にゆったりした落ち着きを与えているようである（写真11・12）。
- ⑧ 2階は自由動線としたが、マングローブジオラマ裏のスポットウインドウなどほとんど気付かれない部分があるので、何らかの方法で一部には強制動線を設ける必要がある。
- ⑨ 3階は、子どもたちの滞留時間が短いことから、バイオテクノロジーなど内容的に難しい部分をもっと分かり易い表現・展示にする必要がある。
- ⑩ 3階展示場は展示更新後7年を経過し、2階展示場と展示デザイン・色彩等で大きな違いが生じたので、産業科学の発展を加味しての改装・更新が今後の課題である。

入館者数の増減も大切な評価のひとつであるが、常設展が調査研究の成果を資料を通して情報発信する装置としての「展示」であるという観点から、感動や発見とともにいかに探求心や知的好奇心を満足させるかも評価の対象としなければならない。

当館では、近くに水族館や類似の施設が次々に建設されたこともあり、急激な入館者の増加は見

られないが、次第に更新前を上回る入館者数になりつつある。個人入館者、特に中・高校生の増加がみられ、子どもたちの観覧状況に変化がみられる。これらのことや上記の傾向から「子どもたちが楽しめ、詳細な情報を正確に」というねらいはほぼ達成できているのではないかと考えている。利用者の当館への期待・要望（要求）は大きく、これらの全てに応えるのは難しいが、さらに行動追跡（動線）調査・滞留調査・アンケート調査などを積み重ねて、必要な情報を分かり易く展示・紹介するとともに、見せる側の意図・メッセージが資料を通して見る側に正確に伝達するように工夫していきたいと思っている。利用目的を持って入館する人が増加しているので、資料収集・調査研究の充実を図り、新しい展示手法の開発に取り組み、多くの利用者が自然に親しみ、理解し、自然とどのように関わっていくかを考えるような展示を目指していきたい。

## ま と め

- 1 博物館の展示活動は、研究者の研究成果を一般の利用者に資料を通して分かり易く紹介することであり、時代の流れに応じた展示更新は重要である。
- 2 新館建設の際に展示更新を考慮することが望ましい。
- 3 展示更新の目的・意図を明確にし、展示のストーリー性を大切にす。
- 4 展示更新は全面的規模で行う方が望ましいが、博物館の活性化のために部分的でも積極的に進めたい。
- 5 学芸員は、利用者の評価を大切にしながら、感動を与える展示装置を開発し、情報を正確に発信・伝達できる展示とするよう努める必要がある。

## 参 考 文 献

- 新井 重三・佐々木朝登 編集. 1981：博物館学講座7 展示と展示法 263PP. 雄山閣出版 東京
- R. S. マイルズ編著. 中山邦紀訳 1986：展示デザインの原理 287PP. 株式会社丹青総合研究所 東京
- 池田 正樹 編集. 1995：ミュージアム(テーマ館・展示館)施設化計画と事業運営資料集 192PP. 総合ユニコム株式会社 東京
- 井出口龍哉. 1991：常設展展示替えの実際 鹿児島県立博物館研究報告10 鹿児島県立博物館. 44-54P. 鹿児島
- 梅棹 忠夫. 1987：メディアとしての博物館 269PP. 株式会社平凡社 東京
- 国立教育会館社会教育研究所. 1997：平成5年度社会教育調査 博物館に関する基礎資料 国立教育会館社会教育研究所. 305-323P. 東京
- 恒吉 正巳. 1984：博物館における見学者の動線調査 鹿児島県立博物館研究報告3 鹿児島県立博物館. 49-56P. 鹿児島
- 日本展示学会「展示学事典」編集委員会. 1996：展示学事典 315PP. 株式会社ぎょうせい 東京
- 山下 廣幸. 1991：「博物館の誕生と展示改装一鹿児島県歴史資料センター黎明館の場合一」季刊・ミュージアム・データ36 丹青研究所. 1-10P. 東京



写真1 旧3階展示場  
(理工系展示)



写真2 新3階展示場  
(自然史応用部門展示)



写真3 旧2階展示場  
(自然総合展示)



写真4 新2階展示場  
(自然総合展示)



写真5 旧2階展示場  
(城山自作ジオラマ)



写真6 新2階展示場  
(奄美大島照葉樹林ジオラマ)



写真7 旧桜島展示室



写真8 新鹿児島島の大地コーナー



写真9 旧分類展示室



写真10 新ディスカバリールーム



写真11 旧エントランスホール



写真12 新エントランスホール